

山雲水月

発行責任者 龍源寺 住職 渡辺龍道



本尊様仏像修復を行います

仏像修復については、当寺報「山雲水月」や総代人世話人合同会議等に於きまして、再三報告して参りました。総代人世話人合同会議にて、修復計画の原案を示したらどうか、との意見を頂戴しました。

三年半以上をかけて、当寺報「山雲水月」紙上で報告や役員会議を数回、平成17年には仏像調査も行い、協議検討を重ねた結果、本年度より修復計画を実行することとなりました。龍源寺本尊様釈迦如来坐像は、当寺の信仰の原点であり本堂に鎮座し、多くの人々を永い間見守り、やすらぎを与え、ご先祖様を守り続けてこられました。

時代時代に併せて修理を施し、修復を続けつつ、引き継いで参りましたが、今回の調査により部品の欠損・破損・箔の剥落・膠（にかわ）の剥離による全体の緩み等が多々発見されました。以来、寺では早期の修復をすることを発願いたしました。今回は、長い間受け継がれて参りました龍源寺の象徴ともいえる本尊様及び脇侍様二体の修復であり、檀信徒はもちろんご縁のある方々にも広くご協力いただき、この修復事業が無事圓成することをお願い申し上げます。この本尊様修復は、世の中を救う一条の光明となると信じております。



↑本尊・釈迦如来坐像



↑脇侍・文殊普賢両菩薩坐像

平成21年

龍源寺年間行事予定

- 1/1~1/3 年頭祈禱・年賀受
1/4~1/7 年始挨拶
※1/10 年賀寺例
※2/3 大節分会
※2/15 釈尊涅槃会
※3/8 大般若・大施食会法要
※3月中旬 筆供養法要
3/17~3/23 春季彼岸会
3/23 旧蚕影山例祭日
※4/8 釈尊降誕会(花祭り)
4/29 大施食会兼蚕影山例祭法要
7/13~7/16 京浜地区檀信徒棚経
※7/28~7/29 第28回子供禪の集い
8月上旬 夏季おてんま
※8/10 中元寺例
8/13~8/16 盂蘭盆会
9/20~9/26 秋季彼岸会
※10/17 檀信徒参拝研修旅行
12月上旬 冬季おてんま
※12/8 釈尊成道会
※12/10 歳暮寺例
※12/31 除夜会
※毎週土・日曜日 書道教室
※毎週水曜日 定例坐禅会
※隔週水曜日 梅花講・琴教室・華道教室
※は、御本寺仁叟寺にて開催
※宗務所執務日は月水金

第28回子供禪の集い

日程が下記予定表の通り決定いたしました。宜しくごお願い申し上げます。
対象：小学校3年~6年生

携帯電話等「こでん供養」を花祭りに修行

ご存知の通り去る4月8日(水)は釈迦降誕会(花祭り)でございました。例年、釈迦誕生図を本堂に掲げ、甘茶を釈迦誕生像に掛ける行事を行っております。仁叟寺の釈迦誕生図は町指定重要文化財でもあり、今からおよそ320年前の貞享2年(1685)に作成されました貴重な画幅であります。



↑上毛新聞社会面記事(4月9日付)



↑法要後に実施された講演会

今回、そのお祝いの行事に併せ「こでん

供養」を執り行いました。「こでん供養」とは聞き慣れない言葉ですが、恐らく全国初の供養であるかと思われます。仁叟寺では例年、筆塚にて筆供養や関係者依頼の人形供養などを営んでおります。針供養等といった行事も然りではありますが、お世話になったモノに感謝し、報恩の念を捧げる行事であります。今や携帯電話は

じめパソコンやデジカメといった電子機器は生活必需品となり、そのモノによって我々の思いが一喜一憂する程のツールとなっております。その思いがこもった携帯電話等電子機器に対しての報恩の供養を行じるのは勿論、この度の携帯供養には環境及び資源活用、モノを大切にすることを養うといった側面も加わります。

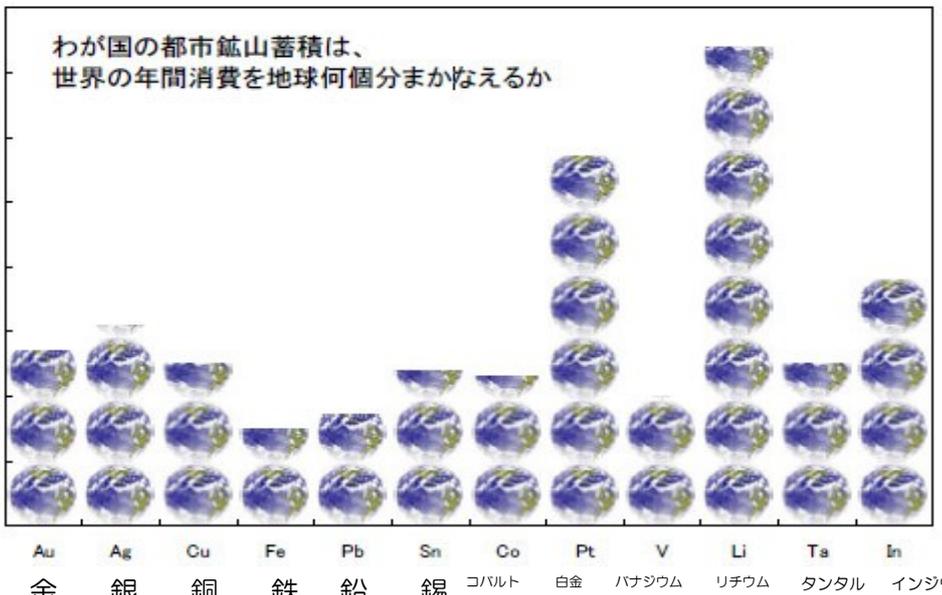
参拝者は約100名、講師にDOWAエコシステムの仲雅之氏、来賓として齋藤軍雄吉井町長を迎えました。ほか翌日には上毛新聞社会面にも記事が掲載されました。また集まった小型電子機器は200点以上150キロほどにも及び、供養後に秋田県大館市の研究施設に送られました。ご協力いただいた方々には厚く御礼申し上げます。

携帯電話やデジカメ・パソコン・ゲーム機といった電子機器の基盤部には、希少金属が多く含有され、いわゆるレアメタルの宝庫であると云われております。それらは「都市鉱山」と称され、下記図の通りの埋蔵量を有します。もし、日本国内に流通している電子機器のリサイクルが可能であれば(その種類にも依りますが)今現在産出されている量の半数以上を賄うことが出来、無資源国日本が

希少金属の資源大国になりうると云われております。特に希少金属は中国・アフリカなど世界でも一部の地域でしか産出することが出来ないとの事です。残念ながら、未だ法整備がなされておらず、貴重な資源が捨てられているのが、今の現状であります。

今回の法要を機に、モノに大切に感謝をする心を涵養する事はもちろん、貴重な資源を活用し、環境問題に対して関心を持っていただければ

幸いです。



仁叟寺通信-26- 「天宮の井戸」

昨年12月に天宮の井戸の改修を行いました。立看板の文章を紹介いたします。

「当寺開山以来の寺の水源で天宮の井戸と呼ばれている。山門横の井戸と合わせ当山水脈の二井戸である。永き間、日照り干ばつや戦時中大勢の学童疎開在山中も、一度も枯れることなく文字通り脈々と水を護持してきた。

昭和四十年代まで使用。以後蓋をして保持してあったが平成二十年に再調査と水質資源調査をし今の形に復元する。右の水道はこの井戸水であり、まさに浄水



↑ 改修された天宮の井戸・井戸の内部の様子

であります。平成二十年師走 当山三十一世啓司代」

なお、水質調査結果は極めて良好。清水坂という地名が近辺にある通り、現在も浄水は絶えることなくこんこんと湧き出しております。

龍源寺探索-23-「木魚」

今回の探索では、龍源寺本堂にある木魚をご紹介します。

木魚は読経の際に、調子を合わせるために用いる法具。円形で横に穴を通して中空とし、表面に玉鱗・一身二頭の龍頭を彫った形状をしています。布団の上に置き、先端に布を巻いた杖で打ち

ます。人を集めるための「梆ぼう」が、明代に頭尾が相接する円形となって読経用に使用されるようになり、更に二頭一身の龍頭となりました。我が国へは、承応年間（一六五二～五五）、日本黄檗宗開祖の隠元隆琦が伝えたといわれ、月舟宗胡がひろめたといわれております。永平寺では一時期、木魚を今様であると撤去したこともりましたが、現在は諸宗に広く用いられています。

当寺では、本堂に「玉鱗工」「爲先祖代々菩提供養 昭和五十四年春彼岸 施主田中信吉」と彫られている木魚があります。



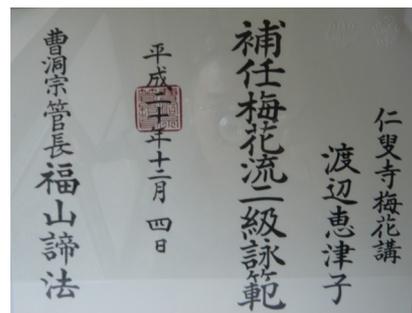
↑ 龍源寺の木魚

梅花講員募集中～龍源寺梅花講設立に向けて～

住職が曹洞宗群馬県宗務所の梅花主事を拝命し、2年半が経過いたしました。残りの任期は約1年半ほどとなりますが、精一杯務めさせていただきますと思っています。

さて、梅花講ですが仁叟寺に講が設置されましたのが平成14年。龍源寺檀信徒の方も仁叟寺梅花講に入講されております。住職も助教という第一歩の教階を持っております。近いうちに龍源寺でも梅花講が設置できればと考えておりますので、梅花講に入ってみたい、興味関心のある方は遠慮なくお問い合わせ下さい。老若男女問わず広く門戸を開放しておりますのでこの機会に入講をお勧めいた

Page 3 します。



↑ 昨年冬に2級詠範の資格を得た仁叟寺梅花講講師の渡辺恵津子さ

平成20年度 寄附者一覧 (敬称略)

平成20年6月
爲 木村家石塔開眼会供養
施主 矢田 木村重太郎
檀製印金置台

平成20年秋
爲 志賀家先祖代々諸精霊供養
施主 松田 志賀一夫
米沢山

平成20年9月
爲 加部家先祖代々諸精霊供養
施主 吉井 加部元信
庫裏屋根修理工事一式

平成20年
爲 杉田家先祖代々諸精霊供養
施主 松田 杉田彰
野菜・漬物沢山

→ 檀製印金置台



役員交代報告

どうも、ありがとうございました。合掌

今年4月29日（祝日昭和の日）に行われます施食會兼蚕影山御祈禱會に併せまして開かれる檀信徒總會にて下記役員さんが交代いたします。当寺ではその席上、委嘱状を授与し、護持会の運営及び寺院の興隆発展につきましてお力添えを願う次第であります。旧役員の皆様、お疲れ様でした。新役員の皆様、宜しくお願ひ申し上げます。なお、いづれも任期は二年間です。

松田地区 旧) 出牛 均 → 新) 渡辺ひで子 旧) 白田 實 → 新) 白田 博
多胡地区 旧) 篠崎悦一 → 新) 篠崎 昭 旧) 小林昔人 → 新) 新井岩雄
矢田地区 旧) 金井理夫 → 新) 金井邦夫 (順不同、敬称略)

行雲流水 (編集後記)

編集人 住職 渡辺龍道

今年4月より新規開園しました吉井町小暮の「めざめ保育園」の理事を拝命いたしました。長男・次男も通園しております。同園は、全林寺ご住職様が理事長を、副住職様が園長を務めまして、仏教理念に基づいた児童教育を行っております。

さて、記事中にもありますように、4月8日花祭りに「こでん供養」を修行させていただきました。龍源寺檀信徒の皆様のご協力も賜り、多数の参列者は勿論、講師の仲先生や齋藤町長さんはじめとする来賓の方々、また多くの「こでん」が集まりました。早速、秋田県の研究施設に送らせていただきました。供養を通じモノに感謝し大切に作る心、更には環境資源問題にも関心を持っていただければ幸いです。

また、去る4月10日に、住職夫妻の仲人媒酌人、『仁叟寺誌』の監修、住職の大学時代のゼミ恩師であります早稲田大学教育学部教授・外園豊基先生がご逝去されまして、通夜葬儀に参列させていただきました。享年65。『仁叟寺誌』は7年間に亘って編纂作業が進められ、平成19年に刊行されました。その間、大学教授としては勿論、政府関連である文部科学省独立行政法人評価委員など公務ご多忙な中、先生が何度も仁叟寺へ足を運ばれ、漸く刊行に至った経緯がございます。ほか、日本学術会議会員、日本歴史学協会会長を歴任されまして、住職の日本中世史関連の論文発表の際にも色々とお世話になりました。改めまして、ご冥福を祈念申し上げます。合掌。

